

を利用する巡礼者がほとんどである。徒歩で行く者は少ない。聖地である、サンチャゴ・デ・コンポステラに到着したことで、精神活動が弛緩してしまっ、気が湧かないためであろうか。

フィニステレは文字通り「地の果て」という意味である。ヨーロッパ大陸の西の果てである。厳密にいうと、ポルトガルのロカ岬の方が経度上では西に位置するが。キリスト教文明以前からその場所が聖地だったらしい。太陽が西に沈む所に、不老不滅の楽園があったと信じられていた。原始的な宗教形態から考えて、太陽や星といった自然物が信仰の対象になるのは当然のことであろう。地球が丸いという発想はないわけだから、沈んだ所と別の場所から太陽が昇るというのも神秘的に感じていたのかもしれない。浄土真宗では極楽が西方にあるという、仏教思想とも共通点があり、聖地が西にあるという現象は興味深い。

筆者は、フィニステレでは、旅の良き友であった杖を崖の上から海に投げこんで旅の終わりの行事とした。

Ⅲ 巡礼行動のアウト・プット、アフター・エフェクト

「私に起きたことのすべてを本に書こうという考えが浮んだ」(コエーリョ, 1987 p. 285)

そして、コエーリョは一冊の小説を書いた。

今のところ、筆者は体系的にそのことについて書くほどの、資料も文献も無いので、質問とそれに対する答えという形式で、とにかく自分の巡礼の記録を残しておくことにしよう。

巡礼の結果は一体何だろう？

Q「巡礼をして自己が何か変わりました？」

A「自分は本質的には変わっていないと思います。でも人間の歩み、歩くという行為には感動しましたね。はるか彼方に目標物があり、それにはなかなか近づきません。でも、自分が歩いてきた所を振り替えると、その自分の足で歩んだ街が遙か彼方にあり、「ここまで歩いてきたんだ」という実感。人間の足って、すごいもんだ。何度もそう思いました。それに面白かったのは、一日の中で自分の気持ちや心が変わっていくのです。午前中は、涼しく快適なので、いろいろ自分の人生の事

やら、自分の日本での生活やら、あれこれ思索を巡らす余裕があるのですが、目的地に着く直前になると、肉体疲労で、ワインと昼飯のことしか頭に浮かばない。数年前のことですが、巡礼路を車で辿ったことがあります。その時は、巡礼者が歩いているのを見た時に、「すごいなあ、特別の人々だなあ」と尊敬の眼差しというか、自分とはかけ離れた人々、とっていました。でもそれは、結局は、誰にでもできる平凡なことなんですね。要は歩けばいいわけですから。決断の問題だと思えます。でも、決断するまで、僕の場合も歩くまで数年かかっていますし、スペインにこの四月から来て、すぐには実行に移せず、六月まで、二月月かかりましたからね。」

Q「前の質問は漠然としていて、答えにくかったと思います。ところで、巡礼の良い点は一体何でしょう。」

A「第一に、多くの人と知り合いになれることでしょうか。しかも、そこではいろいろな国の人々との出会いがある。第二に、たった一人で自分の力だけで、やり遂げた、という自己効能感、自分は自分の人生を生きているという証や実感、充実感。ただ、印象的だったのは、オーストリアから、今回で二回目の初老の男性の巡礼者と話していた時に彼が、すごく良いことを教えてくれたのです。一回目は自分の発見のためだったが、今回の二回目は、スペインを含めて周りの人々への感謝のために歩いている、という言葉でした。世の中は自分一人だけで成り立っているものではない、という使い古された言葉が、その時には現実のものとして感じることができました。第三は、二重の意味で、非日常的な体験ができたということですかね。スペインに一時的に住んでいるという非日常性と巡礼でレオンからガリシア地方へ歩いているという非日常性。なかなかこの二重性のメリットを表現することはできないのですが、二重の意味での疎外状況を克服したということではないでしょうか。私の場合には、巡礼が終わっても真の意味で帰る家がない、という根無し草感覚。マドリッドに帰っても、そこは故郷ではないという感覚。」

Q「では巡礼の悪い点はなにでしょうか？」

A「巡礼中に悪いことが何も起こらなかったの